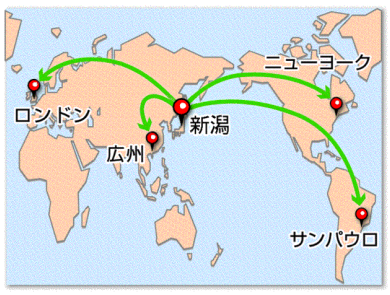
掲載日:2017年06月05日, 面名:解説, 記事ID:KIJ20170605_M001100100AQ02001
(C)新潟日報社

# グローバル にいがた

国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。




第1月曜掲載

## from ブラジル

小野塚　淑子さん
＝村上市出身＝

## 心が騒ぐ祭りの季節

フェスタジュニーナのイベントに参加する子どもたち。６月はブラジル中が浮き立つ時季でもある

毎年6月が近づくと心が騒ぐ。思わず踊りだしたくなる音楽、ごちそうの匂い、人々の笑顔が心に浮かぶとじっとしてはいられない。なぜなら、6月は「フェスタジュニーナ」(6月パーティー)の月だからだ。

フェスタジュニーナの起源は、ヨーロッパの移民たちが農作物を無事に収穫できたことへの大地への感謝を表した習慣だといわれている。6月にカトリックの重要な聖人たちの日が重なったため、そこに宗教的な意味が加わった。ブラジルでは6月中、教会や学校、老人ホームなど至る所でお祭りが開かれる。

お祭り会場には小さな三角の旗がひしめき、食べ物や子どもの遊具の屋台などが並ぶ。トウモロコシやキャッサバ、芋にピーナツなどをふんだんに使った料理、サトウキビの焼酎「ピンガ」にハッカを混ぜた「ケンタォ」などは祭りを盛り上げるのに欠かせない。

もう一つ、祭りに欠かせないのがダンスだ。「サンバの国」だけあって、老若男女問わず踊る人々の姿が自然でかっこいい。クゥアドリーリャといわれるフォークダンスはフェスタジュニーナの風物詩だ。フランス人移民が持ち込んだといわれるこのダンスは、みんなで大きな輪をつくって踊るのだが、たき火を囲んで朝まで踊り続ける所もある。

学校ではリボンや旗を使った凝ったダンスなどが披露される。わが家の子どもたちが通う学校でも、毎年ダンスが催され、おさげ姿にそばかすを書いて色とりどりのドレスを着た女子と、ひげ面につぎはぎのついたジーンズ姿の男子が一緒に踊るのを保護者は何よりも楽しみにしている。

フェスタジュニーナを心待ちにしながら、私はそっと、それを故郷の岩船大祭に重ね合わせる。人間は結局、どこの国の人も、祭りがきっと好きなのだと思う。不景気、政治不安の真っただ中を生きるブラジルに、フェスタジュニーナが少しでも人々の心を潤わせてくれるはずだ。

(小野塚さんは1975年生まれ。サンパウロ近郊のサンジョゼ・ドス・カンポスで暮らしています)

## from NY

池田　雄二さん
＝新潟市江南区出身＝

## 県民性 意外にマッチ

ニューヨーク経済の象徴、ワールドトレードセンター

ニューヨークに住んで4年近くになります。当初は2年の予定で提携会社に出向したのですが、文化や経済、そして何より人が好きになり、今の会社に転籍して、もう少しここで生活していくことにしました。

米国は、トランプ政権に代わってからも株価は高値を維持していて、景気はあまり良くないとは言われつつも、日本に比べれば悪くないと感じます。最近は日本も少しずつ持ち直してきているようですが、こちらの生活や繁華街のにぎわいを見ていると、米国経済の強さを思い知らされます。

しかし、特にニューヨークの物価はとても高く、家賃や外食費は日本の倍程度だと感じます。そんな中でもみんな工夫していて、例えば、若い人はルームシェアをしていますし、安くておいしい店の話題はみんな大好きです。米国にもおいしいものは意外にたくさんあります。もちろん、新潟の新鮮な魚やラーメンにはかないませんが…。

私は会計事務所に勤めていて、主に上場企業の監査を担当しています。ニューヨークは人種のるつぼで、私のチームも米国人のみならず、欧州、アフリカ、中央アジアなど多様な国の人々で構成されています。

それぞれ異なる文化で育っていますし、みんな勝ち残るために必死ですから、彼らとの議論は一筋縄ではいきません。そんな中では、辛抱強さや諦めない強さ、場合によっては自分を押し通す頑固さが必要です。

また、激しい議論だけでもうまくいかず、時には相手を深く思いやることも大切です。そんな環境には新潟の県民性は意外とマッチし、ニューヨークにある各県人会の中で新潟が最大規模であることもうなずけます。

ニューヨーク新潟県人会の新年会には100人以上が集まります。新潟の人たちに触れるといつも温かい気持ちになります。私がここで生きていけるのも、ここまで育ててくれた新潟の環境とわがままを言っても常にサポートしてくれる新潟の家族のおかげです。新潟にいつか恩返しできるよう願って頑張っています。

(池田さんは1979年生まれ。公認会計士として活躍しています)

## from ロンドン

ドゥルーリー和枝さん
＝英国新潟県人会会員＝

## 週末は美しい田園で

コッツウォルズの丘からの景観

平日は24時間金融市場を追いかけ、顧客のファイナンシャルプランニングに没頭しているので、週末は仕事場のロンドンから離れコッツウォルズという田園地方(カントリー)でゆっくり過ごしています。

コッツウォルズはイングランド中央部に広がる標高300㍍以上の丘陵地帯で、総面積は2038平方㌔、新潟県の20%弱です。英国を代表するデザイナーであるウィリアム・モリスが、彼の別荘に近いバイブリーという村を「この世で最も美しい村」と称賛したのは、とても有名な話です。首都ロンドンから車で2時間程度の所にあり、牧草地と農地のパッチワークのような丘陵と、「蜂蜜色の石」と称される地元の石灰岩「コッツウォルズストーン」を使った古い伝統的な建物群が特徴的な景観を成しています。

英国では、週の間はロンドンなどの都市で仕事、週末はカントリーで過ごす人が少なくありません。首都ロンドンでは地価が暴騰し、経済的な理由からも、満足度の高い暮らしをカントリーに追求する方が多いのだと思います。ITの進歩により部分的な自宅勤務が可能になったこともこの傾向に拍車をかけているようです。また、英国人は老後は首都の暮らしを離れ、カントリーで庭いじりをしながら暮らす人が多いです。

英国のカントリーは「特別自然美観地域」の指定を受けている地区が多数あり、家の外観を変更することが禁じられています。それ以外の地域でも家の増築には特別な許可が必要で、また、土地があっても簡単に家を建てることはできません。主な理由は地域の景観を損なうからで、カントリーは法制面からも保護されています。

地元の人、老後住む人、週末だけ住む人…さまざまですが、カントリーは英国人に愛されています。渡英の際にはぜひ一度訪れてみてください。

(ドゥルーリー和枝さんは1965年生まれ。公認ファイナンシャルプランナーとして活躍しています)

## from 広州

三ヶ月　剛さん
＝新潟市西区出身＝

## 人は温かく食も豊富

長寿路駅・上下九通りにある商店街。看板の「食は広州にあり」という日本語表記に感動した

「10月から中国に行ってくれないか」

そう上司に言われ、はや半年が経過した。当時は不安と緊張の中、家族と離れるつらさもあったが、それでも海外赴任の経験は自分のためにもなると転勤を決心した。

私は広州市内に住んでいるが、まずは車の多さに驚愕した。割り込みは激しく、車線はあるようでない。10年ほど前に広州市内で強盗事件や死亡事故が多発したことから、バイクの使用を禁止されていると聞く。その分、レンタル自転車が発達しており、地下鉄も含めて費用は格安。乗り心地も悪くない。人口の多い中国の人々にとっては必要不可欠な交通手段だ。

地下鉄といえば、お年寄りや子連れの人には必ず席を譲る習慣が根付いていることに驚いた。譲り合いでけんかになることもあるとかないとか。人の心の温かさを感じることができる。これは日本人も学ぶべきだと思えた。

広州という街は日本人も多く住んでおり、生活しやすい環境が整っていると感じる。家族連れを見かけることも多く、日本料理屋、日本食を売っているスーパー、娯楽も多い。日本人同士で仲良くなるのも早く、「広州新潟県人会」では新潟出身の方が経営する焼肉屋さんとコーヒー屋さんをはじめ、皆さんにお世話になっている。

気分転換にマカオや香港に行こうと思えば、広州南駅もしくは広州東駅から片道2、3時間程度の新幹線で移動は可能だ。これまた乗り心地は悪くない。そうだ、たまになら、妻に内緒で行くことにしよう。

お金の支払いも携帯のアプリでほとんどが対応できる環境と、生活のしやすさ、食の豊富さ、人の温かさをたっぷり感じているだけに、中国と聞いて気が引けてしまいがちな日本人もいることが気になる。皆さん、ぜひ一度、中国に来て食事でもしてみてはいかがでしょうか。

(三ヶ月さんは1985年生まれ。金属加工油剤販売の仕事をしています)